

第一回 凝然と今治

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第一回は、今治出身の高僧・凝然について紹介し、彼が生きた鎌倉時代の今治を歴史散歩したいと思います。



凝然画像（東大寺所蔵）

●鎌倉時代を代表する宗教家たち

武士が台頭し、世の中が大きく変動した鎌倉時代、それまでの奈良・平安時代の旧仏教に変わり、新しい仏教宗派が誕生しました。新仏教には、法然の浄土宗、親鸞の浄土真宗、日蓮の日蓮宗、一遍の時宗、道元の曹洞宗、栄西の臨済宗があり、庶民の

心を大きくとらえました。

これに危機感を抱いた旧仏教の中には、原点の教えに立ち返り、巻き返しをはかる人々がいました。凝然（一二四〇～一三二二）もその一人で、奈良仏教の南都六宗（三論・成実・法相・俱舎・華嚴・律）や平安仏教の平安二宗（天台・真言）の研究にひと一倍熱心で、仏教史学の著述は生涯一二〇余部一二〇〇余巻におよんだとされます。代表作『八宗綱要』は、彼が二十九歳のとき伊予で著し、旧仏教八宗の教理を知る名著として、現在も読み継がれています。

●鎌倉旧仏教界のスーパースター

凝然の出身は越智郡高橋郷（今、治市高橋）で、出自は有力氏族の越智氏と考えられています。時宗の開祖・一遍（一二三九～一二八九）が名族・河野氏の出自ならば、華嚴宗中興の祖とされる凝然も、それに負けない出自で仏教界に身を投じたのです。

兩名は年齢が一歳しか違わず、ともに伊予国出身でありながら、歩んだ道はとても対照的でした。凝然は、建治三（一二七七）年に東大寺戒壇院（戒律道場）の院主となり、洛東金山院・唐招提寺・般若寺で旧仏教の復興運動を展開し、正和五（一二二六）年に唐招提寺の管長にもなりました。そしてこの過程で後宇多天皇の信頼を得、僧として最高の栄誉「国師号」を授かるなど、旧仏教界で異彩を放ちました。

●凝然が活躍した頃の今治

東大寺には、凝然が在籍した当時の史料

が多数残されています。その中に、「今治津へ着く」と記された建治二（一二七六）年頃の史料があり、今治の地名が港町として登場します。当時の今治は、国府がおかれていたことで、一般には「府中」と呼ばれていました。その海の玄関口として、鎌倉期に登場するのが今治津と桜井でした。

凝然が活躍した時代、瀬戸内海沿岸地域で活発な布教活動を展開するのが、西大寺流・律宗でした。彼らは優れた職人技術を用いて、港湾整備・寺院建築・石塔建立を行い、信者や末寺を獲得していきました。伊予国分寺も律宗によって再興が図られ、しまなみ海道地域には律宗石工の影響を受けた石塔が多数見られます。

乃万地区に集中する五輪塔・宝篋印塔らの大型石塔は、鎌倉末～南北朝期の作品で、勇壮な意匠は律宗石工の技を感じさせます。乃万地区だけで十六基の国重要文化財があり、田園風景と寺社の中にそれらはひっそりたたずんでいます。凝然のふるさと今治は、中世石塔の宝庫であります。



乗禅寺の中世石塔群（延喜／国重要文化財）